

支部のページ

平成23年度九州支部例会の開催について

九州支部では支部独自の年間事業として、支部例会、総会および大会という3つのイベントを企画、実行している。通例として例会は夏から秋にかけてシンポジウム形式で、また、総会と大会は毎年1月の半ば以降(センター試験とその予備日の後)に支部会員に向けた年間の支部事業、会計報告および研究発表として開催してきたが、これらの企画を開催する時期についての決まり事は特に設けられておらず、企画責任者と事務局および支部幹事会の判断で決定されている。ただし、大学が支部事務局を担当している都合上、講義や入試業務のない日取りで、土曜日から日曜日が上記イベントの開催日となってしまう。土日のイベント開催は一長一短であり、演者の方々には休みを返上して講演していただくことになるので、企画責任者は平身低頭の気持ちで参加をお願いしている。また、企画趣旨やテーマの設定も毎回頭を悩ます問題であり、その年々に起こった出来事や開催場所の地域性を意識しながら、出来るだけ広範囲の参加者が興味を持ってくれるような内容を考えて実行している(つもりである)。開催テーマだけの問題ではなかろうが、ふたを開けてみて、参加者数が予想よりも少ない場合もあり、企画している側としてはイベントの開催当日まで緊張状態が続く。このような運営状況の中、今年度の九州支部例会として数名の講師をお招きして11月の終わりにシンポジウムを開催した。昨年度まではもう少し早い時期に同様の企画を実行していたが、本年度は9月の終わりから10月の始めにかけて水産学会秋季大会が長崎大学水産学部で行われたこともあり、例年に比べてやや遅い時期の開催とした。同じ支部内での事業はその開催日程が近接していると、来る人も来ないだろうと思いき、年が明けて1月の終わり頃に開催を予定している支部大会と同時に行ってしまおうか?とも考えたが、支部企画を運営し、実行する人間の頭数が限られている事から、例会、総会および大会という3イベントの同時開催はちょっと無理だろうという支部幹事会の意見に従い、例年通り本シンポジウムはその年で独立した日程で開催したので、その様子を以下にご紹介する。

平成23年11月26日(土)に鹿児島大学水産学部23号教室において「水産関連の汚染物質や毒素について」というテーマでシンポジウムを開催した。昨年の3月に発生した東日本大震災による多方面での被害はこの場で改めて記すまでもないが、漁業、養殖業や加工も含めた水産業に関してもそのほとんどが壊滅状態であるとい



写真1 越塩九州支部長の挨拶

うニュースがテレビ、新聞やインターネット上のニュースという形で、あるいは研究者間のネットワークや実際に現地に入られた方々の報告として私たちの耳に入ってきている。この件に関して、水産学会または学会員の所属する水産系の大学や機関が独自に、または連携しながら様々な対応を行っているのはご承知の通りだが、九州支部、特に被害に遭われた地域から距離の離れた鹿児島という場所に住む我々が支部としてすべきことは、支部会員への情報提供、しかも被災地の状況を把握するための情報ではなく、今回の震災の結果として起こりうることへの対応に関する情報であると考えた。ただし、震災に的を絞った講演は長崎大学での秋季大会でも企画されており、同じ内容の講演を(短期間に)繰り返しても意味が無い。そこで、開催テーマについては支部長や支部幹事の方々に意見をいただきながら、時事的に、また、開催地の鹿児島という場所で参加される方々にとって有用な情報になり得るだろうという内容を目指し、前出のテーマとした。なお、今回の講演題目には公表前の計測データが多数含まれていることから、講演要旨の作成や記録、公表は控えさせていただいた。そのため、以下に紹介する講演内容の記述に関しては筆者の記憶による所が大きい。講演内容の詳細ではなく、あくまでも講演を聴講しての感想として認識いただければ幸いである。

日本水産学会九州支部 平成23年度シンポジウム
開会の挨拶、越塩俊介(九州支部長)

講演題目1. 特別講演「放射線の健康影響と福島第一原子力発電所事故における被ばく医療対応」、大町康先生(独立行政法人放射線医学総合研究所)

放射線医学総合研究所(放医研)の大町先生には千葉県より遠路はるばる鹿児島までお越しいただいた。福島第一原発の事故以来、放射線というものが我々の周りに



写真2 聴講中の参加者

あるということを否が応でも意識せざるをえなくなっている。事故が収束した現在も、環境中の放射性物質の測定結果についてはテレビ等で様々な情報が流されているが、その科学的な性質を理解している人は案外と少ないのではないだろうか。今回講演いただいた内容は放射線とは何か？という物理化学の基礎的な内容から始まって、被ばくという概念や放射線が人体へ及ぼす具体的な影響、また、先生の所属する研究所の活動内容や、震災による福島第一原子力発電所事故への医療チームの立ち上げとその活動に関するものであった。放射線を発する物質は多々あり、その強さを示す単位の違いや、外部および内部被ばくの違い等、放射線および放射性物質についての理解を深める内容であった。特に、事故直後より放医研内で分刻みのスケジュールによって様々な対策チームが形成されて行く様子の紹介は、聞いているだけでも緊張感が伝わってくるものであり、事故当時の混乱を思い起こさせる内容であった。余談だが、筆者の世代では放射線という存在を初めて意識したのがチェルノブイリ原子力発電所事故に伴う放射性物質の飛散であり、その当時はワカメを食べると放射線の影響を軽減できるという怪情報が出回っていた記憶がある。今回の事故直後にも、信憑性に欠ける様々な情報が携帯電話のメールを介して飛び交っていたが、本講演により、参加者の方々は不確実な情報に惑わされないための知識と情報を得たことを期待する。

講演題目2. 「水圏生物毒と公衆衛生」, 小松正治先生
(鹿児島大学水産学部, 食品・資源利用学分野)

鹿児島大学水産学部の小松先生には水圏生物の持つ毒と公衆衛生について、生物化学的な観点より講演していただいた。水産食品の流通や加工は食品衛生の基準に即して衛生的な管理下にあるとされている、しかしながら、食中毒は依然として我々には身近な現象であり、散発的にその発生が報告されている。流通や加工での衛生

面に問題がないとすれば、生物自身が毒性のある物質を産生する可能性を疑わなければならない。しかし、「毒」はなぜ毒たりえるのか、これは素朴な疑問だが、ある生物にとっては毒性のない物質が、別の生物体内では毒性を示す現象のメカニズムを、細胞および分子レベルで説明しようとする試みとその成果について、シガテラ毒など水産分野ではなじみのある物質を例に挙げて、わかりやすく説明していただいた。作用メカニズムの質が異なるのを承知した上での比較だが、生物毒は放射性物質よりも半減期が短い物質が大半を占めている一方で、哺乳動物に対する致死量が意外な程少量のものもあり、人の健康状態に深刻な被害を及ぼす可能性という点では放射性物質よりも身近に存在する危機だという印象を受けた。また、小松先生の講演内容の多くが生化学的なテクニックを駆使した基礎研究によって明らかにされた知見である。水産学は最終的に応用を目指した学問であるとはいえ、基礎の積み重ね無くして応用無しとの認識を新たにさせられた。

講演題目3. 「石油流出に備えて」, 小山次郎先生 (鹿児島大学水産学部, 海洋資源環境教育研究センター)

鹿児島大学水産学部の小山先生には水圏環境への石油流出が起こった場合の拡散や消失の観測事例とその対策について、ご講演いただいた。石油の流出は規模の大小にかかわらず世界中で頻繁に起こっており、長期間に渡って周辺海域の汚染を引き起こしている。石油流出の原因はプラントからの流出やタンカーの座礁など様々だが、水圏環境への流出で第一に問題となるのは海流による周辺海域への拡散である。陸地と異なり水圏環境、特に海洋では流出した石油の拡散を食い止める物理的な障壁が存在しない。したがって、この拡散を可能な限り早い段階で食い止めることが、環境への影響をより少なくすることができる。これを実現するためには、シミュレーションによる石油流出、拡散のモデル作成が必要不可欠であり、理論的モデルに基づく具体的な対策をあらかじめ準備しておくことが可能である。一方で、理論的モデルはあくまでも理論であり、それによって推定された拡散の挙動は実際とは異なるのではないかという疑問は残るが、石油流出のように対策に緊急性を要する事項に関しては、現場での柔軟な対処とともに、対策の基礎となる準備が必要となるのは言うまでもない。

以上、放射線、生物毒および石油流出という、いずれも我々の健康に直接または間接的に影響する話題について、各先生方にお話いただいた。急なお願いにも関わらず講演をお引き受け下さった先生方にはこの場を借りてお礼申し上げます。 横山佐一郎 (鹿大水)